

名門女子大生

美玲 二十一歳

第二卷 美人女子大生の

野外ヌードデッサン

海老沢 薫 著

## 内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 大学のゼミに現れた悪女

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 Web連載小説

■ 著作権について

「名門女子大生 美玲二十一歳 第二巻 美人女子大生の野外ヌードデッサン」（以下本書と表記する）の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■ まえがき

美玲にとって忘れられない衝撃的な大学三年の夏休みが終わり、大学は後期の授業を迎えていた。

夏休みの最後に絶交したかつての親友達と大学のキャンパス内で会う事を恐れていた美玲だったが、絶交したかつての親友の一人、めぐみがいるゼミの授業だけは避ける事ができなかつた。

後期が始まって最初のゼミが行われる教室に緊張した面持ちで向かった美玲は、そこでおもいがけない光景を目の当たりにする。なんと、教室には自分から親友達を奪った憎むべき相手、杉山千秋の姿があつたのだ。

ゼミの教授で美玲が尊敬してやまない川辺の口から、千秋が特別に後期から同じゼミに参加する事を聞かされた美玲は、得体の知れない恐怖に怯える。

そして、急遽開催される事になったゼミの合宿で、美玲は千秋からとんでもない羞恥の命令を受ける。

それは、親友達を失う事になったあの忌まわしき小旅行で味わった悪夢の再現となり、美玲の大学生活を大きく変えていく分岐点になるのであった。

■ 第一章 大学のゼミに現れた悪女

九月も終わりに近づき、大学の後期の授業が始まろうとしていた。美玲にとってはあまりにも長く感じられた夏休みだった。どれだけ多くのものを失い、そしてどれくらい人生の流れが変わってしまったか、それを思うだけ泣きそうなくらい絶望的な気持ちに苛まれた。幼い頃からの親友達と一泊二日で行った海辺の町への小旅行、その最後はあまりにも美玲にとって鮮烈な思い出を心身共に刻み込んでいた。海辺の田舎町で町興しの一貫として行われた競歩大会に、高校水泳部の後輩達の策略により無理やり出場させられた美玲は、大勢のギャラリィの前で途轍もない醜態を晒してしまったのだった。そして、最下位でゴール地点の駅前にどうか到着した美玲に待ち受けていたのは、さ

らなる羞恥地獄へと突き落とす屈辱の罰ゲームであつた。駅前でゴールすると同時に絶頂を果たしてしまった美玲は、目覚めると駅前広場の街灯の柱に素っ裸のままその身体をロ―プで縛り上げられていた。そして美しき裸の女神像として、大勢の町民や観光客の前で晒し者となり、その隣に立って記念撮影する者達が後を絶たなかつた。勿論、それらの写真には拡散されたら町を揺るがす大問題になるため、SNSへの投稿などは禁止されていたが、代わりに悪ノリした町民達は、美しい女神像の豊満な乳房や形の良い脂の乗ったお尻を、その感触を楽しむかのうに触りまくつた。

「もういい加減にしてください！」

美玲は何度も叫んだが、皆、哀れな女神の姿を厭らしい目で見つめるだけで、誰もその声を聞き入れる者はいなかつた。

そして、駅前が薄暗くなり始めた頃、ようやく美玲の罰ゲームは終わりを迎える事にな

ったが、その頃には美玲の体は真っ赤に染ま  
り、至る所に何百人という人々に体を触られ  
た手形の痕が残っていた。さらに、美玲の足  
元はその秘部から溢れ出た蜜でびっしりと  
濡れ、恥ずかしいくらい大きな水たまりを作  
っていたのだった。

大学三年の長い夏休みが終わり、後期の授  
業が始まった。美玲は、沈痛な面持ちで所属し  
ているゼミの授業が行われる教室へと向かつ  
ていた。同じゼミには、こないだの小旅行で  
一緒だったためぐみもいた。彼女とは幼い頃か  
らの大親友であつたが、あの小旅行の時に千  
秋の策略によつて二人の絆はバツサリと断ち  
切られてしまい、それ以来互いに連絡を取つ  
てはいなかつた。

千秋から与えられたどうしても逆らえない  
命令だつたとはいへ、寝ている大親友の上  
に覆い被さるように四つん這いで跨り、自らの  
秘部を弄つた挙句、そこから溢れ出た蜜で親



友の顔を濡らしてしまった事は、美玲にとつて一生消える事のない汚点となった。どうしてあんな酷い事をしてしまったのだろう、美玲は悔やんでも悔やんでも悔やみきれず、大切な親友を失ってしまった事を酷く後悔し、あれからずっとそのことを引きずっていたのだ。もうきつと、めぐみは自分の事を親友だとは思ってくれない。彼女は、あんな卑猥な行為をした自分の事をただのド変態としかもう見てはくれないだろう。幼い頃からずっと一緒に同じ環境で育ってきた大親友にそんな目で見られることはあまりに辛く、美玲はもうあの小旅行で一緒だったかつての親友達とはできれば会いたくなかった。美玲が躊躇いながら大学の廊下を歩いていると、いつの間にかゼミの開始時刻を過ぎており、教室に入るとすでにゼミの担当教授の川辺が話し始めていた。川辺は五十代半ばの男性教授で、ユーモアに溢れた穏やかな雰囲気

気を漂わせていて、学生達からの人気は高かった。そのため、川辺のゼミに入るのは非常に難しく、高い競争倍率の試験と面接を経てようやく合格した十名ほどの学生しか川辺ゼミを受講する事はできなかったのだ。

教室の中は座席がコの字形に並べられ、一つだけ空いていた廊下側の角の席に美玲は急いで座った。そして恐る恐る教室の中を見渡すと、めぐみは美玲とちょうど対角線上にある席に座っていて向き合うような形になっていた。ああ、恥ずかしい・・・。めぐみの顔を見たのは、こないだの小旅行で美玲が素っ裸のまま海辺に置き去りにされた時以来で、美玲の脳裏にはあの時の忌まわしい記憶が一口气に蘇った。美玲はすぐに俯き、めぐみの方には決して視線を向けないようにしている。ふいに川辺の喋る言葉が耳に突き刺さった。

「今日から私のゼミに新しく加わる事になった。杉山千秋さんです。さあ、どうぞ立って！」

川辺が発した学生の名前を聞いた美玲は、思わず顔を上げた。すると、めぐみの隣の席から立ち上がる一人の女子学生の姿が視界に入った。後期から、川辺先生のゼミに参加する事になった杉山千秋です。どうぞ宜しくお願いします。その学生は深々と他のゼミ生たちに頭を下げると、すぐ傍に座る川辺から「よろしく」と声を掛けられ席に座ったのだった。どうして、彼女がここにいるのよ。・・・美玲は動揺を抑えきれなかった。それはまさに青天の霹靂としか言いようがない出来事だった。美玲は、川辺のすぐ傍に座る千秋の姿を、脚元を僅かに震わせながら見つめていた。すると、川辺がそんな美玲の心の内の疑問に答えるかのようにな、ゼミ生全員に千秋の簡単な紹介をした。

「杉山さんは、かねてから私のゼミに大変興味を持っていたてくれたようで、今回、彼女が

私に提出してくれたレポートの内容と、ここに  
いる足立さんからの強い推薦で、特別に後  
期からのゼミ参加を認める事にしました」  
川辺の説明を聞いた美玲は、脚元をさらに震  
わせた。わざわざ川辺教授にレポートまで書  
いて提出し、このゼミに入ろうとした千秋、  
そしてそれを強く推薦したというめぐみ、強  
引なまでの手法を使って千秋がこのゼミに入  
って来た目的、それは川辺ゼミに対する興味  
や熱意では決してないと、美玲にはすぐに分  
かった。千秋は自分を辱めるために、何処ま  
でも追いつめて来ようとしているに違いな  
かった。  
一体どこまで私を苛めれば気が済むの。  
。千秋のあまりの執念深さに、美玲は恐怖  
さえ覚えた。すると、千秋が突然そんな怯え  
る美玲の方を向き、不敵な笑みを浮かべたの  
だ。さらに隣に座っているめぐみも美玲の方  
を向くと、彼女は鋭い軽蔑の眼差しで睨みつ  
けてきたのだった。

いやぁ・・・お願い、そんな目で私のことを見ないで。美玲は、自分を狙う悪女と、か  
つての大親友からそれぞれ異なる種類の視線を  
向けられ狼狽した。彼女達は自分に見せる表  
情こそ違ってはいたが、心の中に抱いてい  
る想いはきつと同じに違いなかった。  
アナタの事を何処までも追い詰めるから。  
そして、もつともつと辱めてあげる。二人と  
もそう思っているように感じられた。美玲は  
すぐに俯き、二人の視線から逃れた。そして  
いつもなら楽しいはずの川辺のゼミが、その  
日はずっと苦痛でしかなかった。他のゼミ生  
たちが次々と意見を述べる中で、美玲はずっ  
と俯いたまま隅の席で静かにしていた。普段  
なら積極的に意見を述べ、ゼミの中でも中心  
的な存在である美玲のいつもと違う様子を、  
教授の川辺は気づいていたようだったが、幸  
い、美玲は川辺から意見を求められる事もな  
く、波乱の後期一回目のゼミの授業は終わっ  
たのだった。

川辺ゼミの授業は毎週一回、火曜の午後に  
行われる事になっていた。そして、波乱の授  
業が終わった二日後、川辺からゼミ生に対し  
て一斉メールが送信された。内容は、ゼミ生  
の親睦を目的とした一泊二日の合宿を、週末  
に大学の研修施設で行うというものだった。  
どうして急に合宿なんかするの・・・。  
美玲は、思いがけない通知に驚き、そして憂  
鬱な気分になった。川辺ゼミの合宿は大学の  
前期授業が始まる春と、冬休み前の年末に  
行われるのが慣例になっていて、この時期に  
行われるのはかなり異例であった。もしかし  
たら、これも千秋が仕組んだ事なのかも知れ  
ない、千秋が自分をあの小旅行の時のよう  
に辱めるために企てた計画に違いない。千秋  
川辺ゼミに参加するのを知った日から美玲は  
すっかり疑心暗鬼に陥り、あらゆる事が千秋  
の陰謀のようになってしまう。

川辺から合宿開催の通知が来てから程なくして、美玲のスマホに千秋からのメールが届いた。『週末のゼミの合宿よろしく。こないだの旅行の時みたい一杯楽しみましたよね』メールには動画も添付されていて、恐る恐るそれを開いて再生すると、なんとそこにはこないだ美玲が強制参加させられた競歩大会の様子映つていて、大勢の沿道のギャラリィの前を素っ裸で歩く美玲の姿が克明に映し出されていたのだった。いやあああ。美玲はすぐに動画を停止した。あの日、こんな痴態を大群衆の目前で晒していたのかと思うと、恥ずかしくて死にたい気分になった。そして千秋はゼミ合宿でまた卑猥な命令を自分に与えるつもりで、それに従わなければ、この動画をばら撒くと警告しているのだらう。こんな動画が友人や家族、さらに大学中に拡散されるような事になれば、これからどん

な顔して生きていけばいいかさえ分らない  
千秋からの脅迫メールは美玲を心の底から震  
え上がらせ、不安のドン底へと突き落とす  
いた。



■ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 「羞恥」 「露出」 「辱め」 をテーマとした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>